

**The
31st**

Regular Concert



**SAWA High School Wind Band
2017**

ごあいさつ



レギュラー コンサートに向けて

茨城県立佐和高等学校長 飛田 吉雄

本日ここに、第31回の定期演奏会が開催されますこと、とてもうれしく思います。このように長きに渡って続けてこられましたのは、生徒達(本校部員)の努力はもとより、吹奏楽部後援会、本校PTAの皆様、そしてたくさんの方々のご支援とご協力があったることと、大変感謝致しております。

私の毎朝の出勤は、校舎入口で吹奏楽部の音出し(練習)の出迎えがスタート(一日の始まり)です。また、退勤時には素晴らしい音楽(時には音出、時には演奏)によって見送られております。時には昼休みの時間にも練習の音が校舎内に響き渡っております。更に、休日や長期休業中も朝から晩まで様々な練習をこなすなど、ほんとうに頭が下がります。

「継続は力なり」、「努力に勝る天才無し」、そして「努力は嘘をつかない」という言葉は、本校生徒の為にあるのではないかと思う位です。

本日は、日頃の成果を十分に発揮し、素晴らしい演奏を皆様に披露できますことをお約束いたします。どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい。



茨城県立佐和高等学校吹奏楽部後援会長 池田 真治

本日はご多忙中にもかかわらず、第31回佐和高等学校吹奏楽部定期演奏会にご来場頂き誠にありがとうございます。おかげさまで昨年度は通常の活動に加えて新規事業としてマーチングを取り入れ、東関東マーチングコンテストに出場することができ更に大きな飛躍の年となりました。本年度も昨年度を超えるべく早朝から夕方遅くまで練習に励んでいるようです。本日も部員一人一人の熱い思いの込められた佐和高サウンドを聴かせてくれるものと思います。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

本演奏会の開催にあたり、校長先生をはじめ諸先生方、また先輩方、PTA、後援会の皆様のご支援とご協力に深く感謝を申し上げます。



茨城県立佐和高等学校吹奏楽部 部長 池田 歩実

本日は大変お忙しい中、佐和高等学校吹奏楽部第31回定期演奏会にご来場頂きまして、誠にありがとうございます。

我が吹奏楽部も創部32年目を迎え、第31回定期演奏会の日を無事に迎えることができました。毎年このように演奏会を開くことができますのも、ご指導頂きました諸先生方、OB・OGを始めとする諸先輩方、メンバーの活動にご理解とご協力をいただきました方々と家族、そして本日ご来場いただきました皆様の温かいご支援、ご理解があったることと部員一同心より感謝をしております。昨年度はマーチングという初めての試みに挑戦し、東関東大会で銀賞を受賞することができました。また、今年も昨年に引き続き1部ではサクソフォン奏者の上野耕平さんをゲストにお迎えしての演奏、さらに2部ではマーチングステージがあります。部員一丸となって本日の演奏会を成功させるため、日々練習に励んできました。その成果を発揮できるよう、全力で演奏したいと思います。皆様、最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

終わりに、佐和高校吹奏学部を支え、応援して下さい下さる全ての方々にこの場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

指揮者紹介



茨城県立佐和高等学校吹奏楽部顧問 枝川 孝行

茨城県出身。茨城大学教育学部音楽専修、同大学院教育学研究科(音楽教育専修音楽学専攻)を卒業。平成20年大洗高等学校に赴任。7年間音楽科教諭として、教科とマーチングバンド部の指導にあたる。平成27年佐和高等学校に着任。本年で3年目を迎える。県内高校唯一の吹奏楽とマーチングの両立、奏者と聴き手が感動する音楽を目指し、「夢は夢にあらず」を信条に生徒と日々追求している。

プログラム

〈第1部〉クラシック・ステージ

1997年度全日本吹奏楽コンクール課題曲より

五月の風 (真島俊夫)

2017年度全日本吹奏楽コンクール課題曲より

スケルツェンド (江原大介)

宇宙の音楽 (フィリップ・スパーク)

ニューヨークからの4枚の絵 (ロベルト・モリネッリ)

〈第2部〉マーチング・ステージ

In the stone (モーリス・ホワイト)

Feel the love (アラン・シルヴェストリ)

The Beatles Medley (J. レノン & P. マッカートニー)

——— piece of peace stage ———

〈第3部〉ポップスステージ

John Williams Swings!

Cantina Band／キャンティーナ・バンド (映画「スター・ウォーズ」より)

Catch Me If You Can／メインテーマ (映画「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」より)

Swing, Swing, Swing／スウィング、スウィング、スウィング (映画「1941」より)

恋 (作曲 星野 源／編曲 郷間幹男)

ディズニー・ステージ

ディズニー・プリンセス・メドレー

ライオンキング・メドレー

曲目解説

〈第1部〉クラシック・ステージ

五月の風

五月の風（英 Sweet Breeze in May）は、真島俊夫作曲による1997年度全日本吹奏楽コンクール課題曲であり、6/8拍子のマーチである。作曲者の真島俊夫は1985年に「吹奏楽のための交響詩 波の見える風景」、1991年に「コーラル・ブルー 沖縄民謡「谷茶前」の主題による交響的印象」を作曲しており、課題曲に選ばれたのは本作が3回目であった。

真島は本作に対して「吹奏楽の高度な曲に挑戦するのも素晴らしいことであるが、吹奏楽の原点には、常にマーチがあると思う。そして、この曲は標題音楽ではないが、全体的に爽やかな“五月の風をイメージ”して欲しい」と述べている。まさに爽やかな風が曲全体に流れる、吹奏楽における傑作のマーチの一つである。

スケルツェンド

スケルツェンドとはイタリア語で、戯れるように、軽快にという意味であり、語源の scherzare は、「遊ぶ」「ふざける」「冗談をいう」の意味を持つ。

西洋音楽の中ではベートーヴェン〈交響曲8番〉2楽章やラフマニノフ〈ピアノ協奏曲2番〉3楽章に現れる楽語であるが、作曲家の江原大介氏によれば「表面的にはおどけた作品であるが、中身は大変シリアスな作品」と評するように、和声や旋律に沢山の仕掛けが施されている。曲を通して終始モチーフとなるのは、増四度の音程であり（F-Hなど）西洋音楽の伝統的な書法が多く取り入れられている。緊張と弛緩、加速と減速など聴き手の想像を軽やかに次々と超えていく楽曲である。

宇宙の音楽

『宇宙の音楽』は、“宇宙の起源”と“果てなき宇宙の深淵”について、作曲者本人が純粋に心惹かれたことを反映した作品である。元々は金管バンドのために書かれ、2005年作曲家の手によって吹奏楽版が出された。様々な観点から論じられる大曲であるが今回は、作曲家自身の解説を記載する。

Philip Sparke（フィリップ・スパーク）自身による解説

曲名は、「万物の根源は数である」とする古代ギリシャの数学者ピタゴラスによって唱えられた“宇宙は、振動数比率が単純に整数倍である音程によって形成される純正な音階と同じ法則によって、その調和が保たれている”という理論から、導かれている。ピタゴラスは、また、その音程比率は、太陽系内の六つの惑星（当時は、肉眼で観測できた水星・金星・地球・月・火星・木星をもって6個と考えられていた）が太陽から隔てる距離に一致すると信じており、さらに、「それぞれの惑星は固有の音を発し、絶えまなく“天上の音楽”を紡ぎ奏でている（ただし普通の人間には一切聞こえず、ピタゴラスだけがその調べを聴くことができた）」と論じた。加えて、古代ギリシャには“ハルモニア”という言葉があり、これは現代の“ハーモニー／和声”とは異なる、“音階”や“協和音程”を表わすものであって、さらには、その完成美を極めたものとして宇宙の本質そのものを体現する言葉と考えられていた（当時、紀元前500年頃は、歴史上最古の音楽形態である単旋律音楽しか存在していなかった）。このピタゴラスの理論による“六つの音”は、本作品後半の『宇宙の音楽』および『ハルモニア』のセクションで、その土台を構築する主題として使われている。

曲目解説

作品は、切れ目なく続く3つのセクションからなるが、まず冒頭は、『 $t=0$ 』を喚起するホルンのソロで幕を開ける。“ $t=0$ ”とは、「宇宙の誕生（ビッグバン）の瞬間 t には、時間・熱量・素粒子・重力・磁力・元素などすべてのものが無（ゼロ）であった」という、いま最も多くの科学者達がほぼ確信している考えを表わしている。そしてこのソロのあとに、時間が生まれ宇宙が広がってゆく“ビッグバンその後”の描写が続く…あまねく森羅万象は、たった一つの“点”の爆発から生まれたのである！

次の緩やかなセクションは、『孤独な惑星』—地球についての黙想録である。太陽系内の他のどの星にも起こらなかった奇蹟とも言える偶然が、地球の進化を“命を育む惑星”として導いてきた。そして今や我々は、遙かなる銀河に向かって毎日のように、他の知的生命体を探す調査を続けているのである。

宇宙空間のいたるところに出現する『小惑星帯と流星群』は、危険性があるものも無いものも選択の余地なく、地球へ頻繁に迫ってくる…その情景を描写した後、この曲は、『未知』への問いを内に秘めながら、壮大なエンディングへと向かう。我々が開発を推し進めてきた大宇宙への飽くなき探究は、我々の将来にさらなる文明の発展をもたらすのか、それとも破滅の時を暗示するものか…。

（原文／P.スパーク 訳／黒沢ひろみ）

ニューヨークからの4枚の絵

ニューヨークからの4枚の絵は、イタリアを代表するサクソ奏者フェデリコ・モンデルチのために作曲され、大都会ニューヨークの夜明けから日没までの街を描写した標題音楽である。作曲家ロベルト・モリネッリ（1963 - ）はイタリアのボローニャ室内管弦楽団の芸術監督や、ペスカーラ音楽院のヴィオラ科講師を務める傍ら、作曲家・編曲家としても活動している。サクソのための作品は、2001年に発表した「ニューヨークからの4枚の絵」のみであるが、同曲はオーケストラ版のほか、ピアノ版、弦楽合奏+ピアノ版などがあり、全曲で20分に及ぶ。今回は2011年に作曲家によって出された吹奏楽版を演奏する。ニューヨークの持つ幅広い音楽、クラシック、タンゴ、ジャズ、ミュージカルなどの要素が各楽章に融合されていることが大きな特徴である。

ソプラノ・サクソによって演奏される第1楽章の「ドリーミー・ダウン（夢のような夜明け）」はマンハッタンの摩天楼に太陽の光が差し込む夜明けが描かれる。上野耕平氏によれば、「ニューヨークの秋の寂しさやピンと張り詰めた朝の冷たい空気の中を、歩くようなイメージである」という。続くアルト・サクソによる第2楽章の「タンゴ・クラブ」は、ニューヨークに生きたタンゴの巨匠アストル・ピアソラに捧げられ、情熱的なラテンの調べが流れる都会のクラブの喧騒を描いている。テナー・サクソに持ち替えての第3楽章「センチメンタル・イヴニング」は、テナー・サクソの甘美な旋律が、夕日に沈むマンハッタン島を想起させる。第4楽章「ブロードウェイ・ナイト」は、最後に相応しく、ニューヨークの輝かしい光やライトに照らされ、華やかに疾走するブロードウェイの夜がアルト・サクソで奏される。



上野耕平

茨城県東海村出身。

8歳から吹奏楽部でサックスを始め、東京藝術大学器楽科を卒業。

これまでに須川展也、鶴飼奈民、原博巳の各氏に師事。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。

2014年11月、第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。現地メディアを通じて日本でもそのニュースが話題になる。また、スコットランドにて行われた第16回世界サクソフォンコンgresでは、ソリストとして出場し、世界の大御所たちから大喝采を浴びた。2015年9月の日本フィルハーモニー交響楽団定期公演に指揮者の山田和樹氏に大抜擢。この公演は、クラシックサクソフォンの可能性が最大限に引き出され、好評を博す。また2016年4月のB→C公演では、全曲無伴奏で挑戦し高評価を得ている。

CDデビューは2014年『アドルフに告ぐ』、2015年にはコンサートマスターを務める、ぱんだウインドオーケストラのCDを多数リリース。ソロCDの最新作、「Listen to...」を2016年8月にリリースしている。

現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。

また2016年4月からは昭和音楽大学の非常勤講師として後進の指導にあたっている。

《The Rev Saxophone Quartet》ソプラノサクソフォン奏者、ぱんだウインドオーケストラコンサートマスター。



piece of peace

2017年春に結成されたマーチングパーカッションの演奏、ダンスによる異色のパフォーマンスチーム。パフォーマーは国内や海外で経験を積み、マーチング業界において幅広く活躍している、仲本克也と笹原泰成。佐和高校のメンバーにも出演して頂き、本日が初舞台となります。

ポップでセンセーショナル、洗練されたパフォーマンスをご覧ください。